出来事の情動性が共同想起に与える影響

—情動映像と中性映像を用いた実験的研究—

○中澤綾華[1]・田中秀樹[2]・＃森本修充[2]

([1]広島国際大学大学院心理科学研究科・[2]広島国際大学心理学部心理学科)

目的

話し合いは再生の成績を向上させ，事象の全体像を捉えることが可能になるが，その反面，実際には自分が見ていない対象について，あるいは映像自体が異なり決して見ることのできない対象についてさえ被験者は記憶を持つ（兼松ら，1996)。

大沼ら（2002）は，個人想起実験で，出来事の情動性によって情報源誤帰属の発生がどのように異なるかを調べ，情動映像を見た場合の方が，時間経過による情報源モニタリング能力の減衰が顕著であると示した。

これらのことから，共同想起場面で出来事の情動性によって他者による情報が記憶に与える影響に着目し，他者に与えられた情報による想起内容の変化について検討することを目的とした。

方法

対象　書面で同意の得られた大学生 53 名（情動・個人群 12 名，情動・共同群 14 名，中性・個人群 13 名，中性・共同群 14 名)。

材料　情動映像に「knowing」（2009），中性映像に「画家と庭師とカンパーニュ」（2009）を使用。どちらも字幕なし日本語音声ありで 5 分程度。

手続き　二人一組になって実験室に入室してもらい，映像を提示した。映像終了後，一枚ずつ白紙を渡し，個人で，憶えていることについて白紙に書き出してもらった（1 回目想起)。その後，個人群では部屋を分かれて IC レコーダーに報告する形で話してもらい，共同群では憶えていることについて話し合いを行ってもらった（2 回目想起)。そして，もう一度記憶していることを個人で白紙に記入してもらった。その際共同群では，「話し合いに基づいて相手の意見を取り入れて記入する際にはその部分に赤線を引いてください」と教示した（3 回目想起)。一週間後，再び二人の被験者を集め，前回記憶していたことを個人で白紙に書き出してもらった。その際共同群では，3 回目の想起と同じ教示をした（4 回目想起)。

結果

赤線数について情動群と中性群で比較した結果（図 1)，赤線数において有意な群間差はみられなかった（p＝n.s.)。

また，他者に与えられた記憶が，どのように変化したのかを検討するために赤線の分類をし，パターンに下記のようなものが挙げられた。

1. 一週間後にそのまま相手の記憶として残っていたもの
2. 一週間後に相手の記憶を自分の記憶として認識しているもの
3. 一週間後に相手の記憶の一部を自分の記憶として認識しているもの
4. 一週間後に自分の記憶を相手の記憶として認識しているもの
5. 一週間後に自分の記憶の一部を相手の記憶として認識しているもの
6. 一週間後に忘れているもの
7. 一週間後に新たに思い出し，それを相手の記憶としているもの
8. 全体もしくは一部の記憶が変容しているもの
9. すべての分類に当てはまらないもの

次に，他者の記憶をどのように変化させ，それぞれどれくらい生起しているかについて検討するために，記憶生起指数を以下の方法で算出した。

$$\text{記憶生起指数}=\frac{\text{各パターンの生起個数}}{\text{パターン1〜9の合計数}}\times 100$$

記憶生起指数についてパターンごとに情動群と中性群で比較した結果（図 2)，相手の記憶の一部を自分の記憶として認識しているもの（パターン 3）については，情動群は中性群に比べ，有意に記憶生起が多いことがわかった（p<.05)。

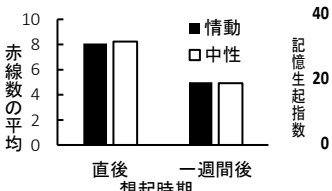

図 1 出来事の情動性と赤線数の比較

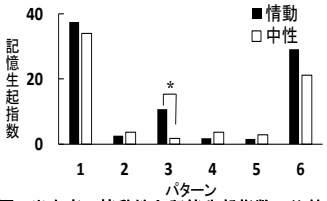

図 2 出来事の情動性と記憶生起指数の比較

考察

以上本研究の結果，情動的な出来事において，同じ体験をした者同士が体験したことを話すことで，相手の記憶を自分の記憶に変容させることが示唆された。このことは，記憶の整理に同調あるいは納得が強く関与していることを推察させる。

惨事ストレス対策として，デブリーフィングによる PTSD への予防効果は，現在では否定され，反対に悪化する場合も報告されている（金ら，2003)。一方で，インフォーマルなデブリーフィングの有用性が示唆されている(新福・原田, 2015)。上記を考え合わせると，自由な想起・自然発生的な話し合いが望ましいことを踏まえ，さらに，個人の記憶変容によるデブリーフィングの有用性について考えていかなければならないと示唆される。